

## 執筆者紹介

長者菜央子	本学欧米言語文化専攻博士前期課程修了（2015年9月）
鈴木 恵介	本学欧米言語文化専攻前期課程修了（2015年3月）
中江 由貴	本学欧米言語文化専攻前期課程修了（2015年3月）
青木 萌	本学非常勤講師
横山 昌子	本学中国言語文化専攻博士後期課程3年
王 子成	本学中国言語文化専攻博士後期課程1年

## 編集後記

この数十年、科学技術の発展はただただ目まぐるしく、世の中を劇的に変えていく。我々の生活様式も、子供の頃と今とはあらゆる面で異なってしまった。特にこの数年、世間の注目を集めているのが日常生活にまで入りこんできた「ロボット」である。ロボットという語は今から100年近く遡る1920年にチェコスロバキア（当時）の作家カレル・チャペックが発案したものである。当初は「人に代わって何かの作業をする機械」でしかなかったが、その後100年近くを経て、お掃除ロボットや、危険物を処理してくれるロボット、飼い犬の代わりにしてくれるロボット犬、介護ロボットにまで進化しつつある。こちらの指示に従って動いたり、簡単な「会話」もするという。それも昨今の人口知能の研究成果のお陰である。

さて、その人口知能に言語運用能力を埋め込むのが現在の課題の一つとなっているが、そのオリジナルと言える人間の言語能力そのものが完全に解明されていない現段階では、ロボットが会話をするといっても人間の言語運用には到底及ばない。その解明にはまだ相当の時間を要することだけは確かである。人間の思考の特質の一つは限りなく深められること、例えば「もしAであればB」そして「もしBであればC」そして「CであればD」と無限の入れ子形式を作り上げることができる。それを限りなく豊かに表現できるのが人間の言語の特質であり、それを可能にするのが人間だけに許された言語能力である。

その人間だけに許された知的活動である豊かな思考から生まれた成果は、小さな歩みではあっても限りなく尊い。小さいけれども確かな一歩として世に出されるこの論集は永遠の輝きを持っていると思う。

（編集委員 片岡喜代子）

## 投稿規定

1. 投稿は本大学院に在籍する者か、本学教員に限る。ただし、指導教授の推薦により、博士前期・後期を修了した後の2年間は投稿できるものとする。
2. 論文は原則として、専攻分野に関わる領域を対象としたものとする。
3. 完全原稿を提出すること。
  - ・ 長さは、日本語・中国語の場合はA4版（横33字、縦29行）で20枚（2万字程度）、その他の言語の場合はA4版（横68字、縦25行）で30枚程度とする。
  - ・ 原稿には英文の標題をつけ、ローマ字表記の名前を明示する。  
(例)  
Verbal Irony and Echoic Use                  KANAGAWA Tarou  
The phonological system of Hum mong ja hoe KANAGAWA Hanako
  - ・ 校正は再校まで執筆者が行うこととし、その際、コンピューター処理に関わるもの以外の加筆・削除は認めない。
  - ・ 原稿を提出する際は、次の3点を提出すること。
    - ア) 完全原稿を出力したもの 1部
    - イ) 原稿表紙（名前・所属・連絡先・論文標題を記した一覧表）1部
    - ウ) 外部メモリ（USB等）にア)とイ)を保存したもの（後ほど返却）
4. 原稿提出締め切り：11月30日（厳守）  
（執筆者は7月31日までに編集委員に提出論文の概要と予定字数を予告すること。）

(2011.12.14 研究科委員会承認)

神奈川大学大学院  
言語と文化論集 第22号

2016年2月 印刷  
2016年2月 発行

編集発行 神奈川大学大学院  
外国語学研究科  
(横浜市神奈川区六角橋 3-27-1)

製 作 共立速記印刷株式会社